

住まい方・住まいの評価に関する 諸要因の検討

名古屋文理短大

小俣 謙二

住まい方や住まいの評価に関する要因は大別して物理的構造などの住居の要因と個人特性や態度などの居住者の要因が考えられる。そしてそれらの要因は住まい方や住まいの評価の個々の側面に関わってくると考えられる。本研究は個々の要因が住まい方や評価のどの側面に関わっているのかを調べたものである。

調査対象は短大1年生を娘にもち一戸建てに居住する主婦138名（平均年齢45.4歳）である。方法は住生活論を受講する学生に調査票を渡し、母親に回答させる方法をとった。調査項目は年齢や就労状況などの個人属性、居住年数や部屋数などの住居条件、団らん・接客・就寝などの部屋の使い方、なわばりの空間の有無、外出傾向、部屋の模様替え近隣との交際や施錠、家の前にいる人の気がかり度、犯罪や災害の不安度、住まいの不満度である。分析では居住密度・居住年数・家族数の住居要因、なわばりの態度・年齢の居住者要因が上記の項目にどの程度寄与しているかを調べるために重回帰分析をおこなった。

その結果、居住密度は空間の機能的分節化・一人の時の外食頻度・住まいの広さに対する不満度に、居住年数は施錠・見知らぬ人の気がかり度に、家族数は防犯上の不安・災害の不安・広さに対する不満度に、なわばりの態度は部屋の模様替えの頻度・防犯上の不安に、年齢は空間の機能的分節化・部屋の模様替えの頻度・住まいの社会的つりあいに対する不満にそれぞれ関係していることが明らかになった。